福井県の「つらら」方言

永江秀雄

私の住む若狭、特にその中央部に位する小浜市と遠敷郡には、「つらら」のことをナンゾ又はナンドと呼ぶかなり広い地域がある。幼ないころのなぞ掛けに「家のぐるりに槍千本」と言つたこのナンゾに囲まれ冬の日々を過ごして来た私も、「ナンゾとは何ぞ？」と思うばかりで近年まではその命名の理由を全く知らなかつた。しかし、数年前に始めて『全国方言辞典』により、私の郡では「つらら」のことを「なんりょー」とも言つており、これは「南鐐」の意であることを教えられ、ようやくナンゾもナンリョウの転であることを知ることができた。これを契機として、私はこと数年にわたり福井県下の「つらら」方言を探査して来たが、今や急速に「ツララ」の一語に統一されつゝある多くの俚言を、今のうちに記録しておくことの必要を痛感し、以下その調査結果について述べたいと思う。

まず、ナンゾを「なんりょう」に結びつけるには少しその中間が飛び過ぎていると思つたので、私の周辺を注意ぶかく見回してみたが、果せるかな、遠敷郡でも山間部の名田庄村にナンジョーやナンジョが現存し、その一部（納田終）ではイテナンジョーとも言つていることがわかつた。更に、同村や上中町にはこれを正しくナンリョーと呼ぶ所があり、小浜市でも今富・国富・加斗などの旧村部にはナンリョーやナンリョがあつて、加斗地区の一部ではナンリュー（飯盛）とかナンジュー（西勢）ともなつている。西隣の大飯郡に入ると、その東部においてはナンチョー（大飯町大島）やナッチョー（高浜町和田）も聞かれるが、多くはツララとなつており、同郡の中部以西ではもつぱらツララのみが用いられている様子である。ただ、同郡の東端（旧本郷村）でチョーセンボ、最も西端（高浜町日引）でイテガネと呼ばれているということが珍しい存在である。

若狭東部の三方郡では、ツララと言う所を別とすれば、全地域にナンリョー又はその変形であるナンリョ・ナンジョ（美浜町佐田・丹生）・ナンゾン（同町日向）・ナ

ンロ（三方町鳥浜）等が用いられている。更に、このナンリョー系の語は敦賀市の西部にも及んでいる（ナンリョー・ナンジョなど。常宮ではナンチョロという）が、敦賀市には南部にホダレ（愛発）又はホーダレ（旧中郷村）、北部にはボーダラ（旧東浦村）が多く、東部からはコングリ（池河内）やコンゴリ（杉箸）が知らされた。

敦賀市北辺の山岳地帯を越えて、いわゆる嶺北地方に入ると大部分がタルキである。タルキが更になまつてタロキとなり、あるいはタヌキ・タヌキドンとなつている所（丹生郡旧四ケ浦町）さえある。また、所々にタンタンタルキ（鯖江市・武生市）、チンチンタルキ（勝山市・吉田郡上志比村）、シンシンタルキ（丹生郡清水町）が聞かれ、カンカンコーリと呼んでいる所（大野市小山地区・吉田郡森田町・鯖江市など）もある。更に、勝山市の一部ではカンタラケ（河合）・ガランボ（中ノ俣）と呼び、ガンダラ（旧勝山町）と呼ぶ古老もあるとのことである。嶺北の中でも敦賀市に最も近い南条郡には、タラリンコ・タランコ（今庄町板取・新道など）が用いられ、敦賀市北部と同じくボーダラと言う所（河野村大谷）もあるようである。また、奥越なる大野郡和泉村や大野市の一部（旧五箇村）では、単にコーリ、又はカネコーリとも呼ばれているが、或は敦賀市のコンゴリやコングリもカネコーリのなまりなのかも知れない。

なお、大飯郡では「つらら」のことをイテガネと呼ぶ所もあるというが、イテルは「凍る」ことであり、イテガネとは大飯郡全般では氷（しかも、主として水面に張つた氷）を意味し、「あまり寒いので、イテガネが張つとる」などと言われ、これは小浜市や遠敷郡、更には三方郡においても同様であつたらしく、今でも冷えきつた手足を「イテガネのようだ」などという譬喩的な用法が残つている。また、本県の最北部である坂井郡の三国町雄島から知らされた所によると、この附近では水面に張つた氷のことをシガと言い、且つ、冷たい手足を「シガみたいだ」ともいうそうである。方言辞典によれば、シガとは東北地方においても氷の意に用いられるという。

以上の俚言のうち、嶺北地方に多いタルキは源氏物語や枕草子にも見える「たるひ」（垂氷）のなまりに違いないが（日本古典文学大系本「かげろふ日記」には「たりひ」とある――「たるひ」の誤読でなかろうか?）、若狭のナンリョーは江戸時代の二朱銀「南鐐」になぞらえた表現であるらしく、或いはナンチョーなどは既に中世以前の文献に見えている「南挺」の転であるのかも知れない。なお、若狭で「たるき」と言えば屋根裏に用いられている「垂木」を思うだけで、昔のなぞ掛けに「タンタンタルキは竹タルキ、油はショウジキ水ハジキ」（「からかさ」のこと）等と言つていたが、このタンタンタルキに越前のような「つらら」の意味を持たせて解釈する者は一人もなかつたようである。

最後に附言したいこととして、私はこの調査中に幾回も〝ナンゾとは子供の「おやつ」のことである〟という回答に接したが、私も子供のころには「ナンダ（を）ほしい」とよくねだつたものである。しかし、このナンゾとは「何ぞ」であり「何か」の意味であつて「つらら」のナンゾとは全く別個である。この両者は成立も異なると同時に、アクセントもはつきり異なつていることに注意せねばならない。かつて、福井県下の「かつぱ」（河童）方言を調査

した際に、若狭ではこれをガワラと言うがその起原は「河原」でなくて「川太郎」であることを説く一助として、私はガワラのアクセントがガワタラ（川太郎）と同形であり河原とは全く異なつていることをあげたことがある。いままた私は、地名「丹生」の語原について探究を進めているが、これを「わらづみ」のニュウと同一起原のものではないかとされる或る学者の説に対して、「丹生」のニュウが「わらづみ」のニュウとアクセントを異にすることからもその所説に疑問の余地があることを考えている。もちろん、アクセントの相違によつてのみ語原の相違を判断することは無理であると思うが、ちようど上代特殊仮名遣の甲乙類の別によつて語原の不同が推定される如くに、アクセントの形式によつて語原の異同を探ること、少くもそのための一資料を求めることはできないものであろうか。そして、もし既にこのような研究がなされているならば、ぜひ御教示を仰ぎたいものと思つている。